悲劇論

厭世觀の三類及び其の要件

樂世といひ厭世といひはた樂天といふ、其の義を窮めて十分ならんとせば、先づ人生の原理より說き起さざるべからず。されどそは本論の能くする所ならねば暫く措きつ。世の詩人を論ずるもの動々もすれば則ち、憤然言を立て僅に右左の一端を揣摩して厭世といひ樂世といふ、畢竟推理の精しからざるが故也。吾人は心理學者の所論以外に、哲學上より厭世觀の構成せらるゝ所以の一斑を論じ、其の種類中著きもの三を擧げ併せて之れが要件を示さんとす。

人生の兩面

吾人をして冒頭第一に前定せしめよ、曰く、人間の本然には一見相反するが如き兩端あり、以て天地萬有の二元の面と相應ずと。所謂兩端とは何ぞや、靈性と肉性、理性と感性、道心と煩惱、博愛と利己、社會性と個人性、凡そこれらのものは精確なる點に於て多少相違する所あらんも、大體は其の義相通じ、一は平等圓融の旨を成ずるの根本となり、他は個々差別の相を現ずるの原理となる、未然は知らずといへども、過去及び現在の經驗以內に於ける事實は此の如し、吾人の前定せんと欲するはこの事實なりとす。復言すれば、人間の本性は由來なりとせんも、表裏相卽の關係によりて一面に平等心と現じ、他面に差別心と現じ、相對し相背くの勢を示す、是れ經驗上否むべからざるの事實也。吾人をして唯此の事實を前定せしめよ、而して其の何ゆゑに然るかを問ふこと勿れ、若し夫れ之れが價値を批判して平等と差別とを是非軒輊するは、やがて厭樂二端の岐るゝ所以にして、後段の論點なりとす。

快感苦感の意義

快苦の意義を論じたるもの古來尠からず、或は之れを關係比較の上より見て度の大小に歸し、或は之れを意識の原理より推して消極積極の論をなす。今快感苦感の意義を考定するに先だち、本論の第二の前定として、人間は欲を有するもの、卽ち欲の動物なりといふべし。饑ゑて食を欲し凍えて衣を欲するは煩惱の欲なり、仁を成し義を成さんと欲するは道心の欲なり、かゝる意味にて人間は欲の動物なり。また欲は必ずしも意識に入らざるも、知らず識らず本然の底にありて活動するを得べし、故に意外に得たる物に對する滿足も同じく欲の滿足といひて不可なし。要するに人間は緖に觸れて雜多の事物を意識的、無意識的に將欲す、人間の人間たる活動は主として此の欲に基く、之れ爭ふべからざるの事實なり。

さて此の前定によりて快苦の義を案ずるに、二條の說明を得べし。其の一に曰く、他の一切の事情を除き、單に快感苦感の二者をのみ抽き出して計量するときは、快は人の得んと欲するもの、苦は人の避けんと欲するものなり、卽ち快苦の二者を欲の尺度に擬するときは、快は欲の向ふ所、苦は欲の拒む所といふべし、隨うて快を樂ひ苦を忌むは人間の自然なり、故なくして之れに背くは自然に背くなり。若し夫れ欲するが故に快なるか、快なるが故に欲するか、此等は此に辨するの要なし。其の二に曰く、

快の來るは欲の充たされたる場合にして、苦の來るは欲の阻まれたる場合なり、斯くいへばとて欲が直接に快を目的とし苦を目的とすといふにはあらず、欲の目的は別に之れあり、別に之れあるの目的に達せると否とに由りて報酬に快苦の品ありといふのみ。或は難じて曰く、人茲に忠義を成さんと欲すとせよ、而して成し得たりとせよ、其の結果は往々却りて苦なることあるにあらずやと。これ僻見のみ、既に便宜のため人間に兩面あることを假定せる以上は、これによりて此の疑を解かんこと易し。おもふに欲の滿足と不滿足とは常に該の欲の主に就きていふべきものか、忠義といふが如き平等心の欲を充たしたる場合には、宜しくまた平等心の快苦如何を考ふべし。上の例の如きは此の標準を誤りたるの論なり、平等心は忠義を將欲し之れを得て快く滿足しつゝ、たゞ差別心は之れがために不快を感じたり、論者乃ち此の差別心の苦を誤り認めて平等心と混淆し、さて平等心は欲する所を得たれど結果は苦なりきといへるなり、この事何後に論ずべし。

人生の目的と快苦

人生の目的の如何なるものなるかは此に論ずべき限にあらず、さはれ之れと快苦の情とは如何なる關係を有するか、總じて目的の成就したる結果の快なるは、猶欲の遂げられたる瞬間の快なるが如きものか。此問題を解釋せんとせば、所謂目的と欲との關係を明めざるべからず、吾人は茲に目的と欲とを合して論ずべし。固より欲を全く一種の衝動のみとし、之れに目的を附して指導するものは別の原理なりとするも一說なれど、本論にては差別心と平等心とを並べ揭げて、差別心には差別的欲あり、之れを指導する差別的目的あり、平等心にもまた平等的欲あり、及び之れが標本となるべき平等的目的ありとするが故に、欲と目的とを別論するの必要なし。換言すれば欲するが故に目的とするか、目的なるが故に欲するか、此れらの先後は論ぜざるべし、たゞ既に目的といふ限は、必ず欲するものならざるべからずといひて已まんのみ。蓋し平等心も差別心も全く欲せざるものを將て目的とするが如きは自然の人情にあらず、隨ひて目的の達せられたる結果は常に快感ならざるべからず、尠くとも之を欲したりし半面は快を感ぜざるべからず。之れに因りて是れを觀れば、人生の目的とは人間の最も欲すべきもの、又現に欲するものにして、之れを得れば快を感じ、之を失へば苦を感ずるものなり。言ひ更ふれば、快樂は直に人生の目的にあらざれど、目的は必然快樂の色を帶着せるものならざるべからず、快樂は目的を達したるの結果なり、報酬なり、快樂說と苦行說とは此の點に於て調和すべし。因りて思ふに人生の眞の目的は感性、理性の兩者を等しく滿足せしむるもの、即ちいはゆる差別、平等調和の域にあるものならざるべからざるの理、此れにて益々明なるに似たり。而して人間は精進以て此の目的に近づき得べし、欲する所に從ひて矩を踰えざるの妙境は蓋しこれならんか、此の點に於て人生は多望なりといはざるべからず、吾人が世の厭世論に同ずる能はざるの一根據此にあり。

目的と手段との齟齬より來る
厭世觀

既に目的といふ、希望して而して之れが手段を取れるものならざるべからず、到達すべからずと信ずるに及べば、目的たるの性は亡ずべし。されどまた獲得せんと欲したりし目的の、時に或は獲得せられざることあり、所謂目的と手段との齟齬これなり。而して欲したるものを得ざるは苦なること既に論ぜしが如し、人もし此

の見を推し廣め、人生の目的限なくして手段の之れにかなふべきなきを信ずるに至らば、此に目的の破壞を來し、人生に絕望して之れを厭離するの已むを得ざるに終らん。人間は欲の動物なりといふの一案、既に如何さまにか欲するの目的あることを前定するが故に、此の目的をさへ破壞せざるを得ざる自家撞着の苦境は、人を厭世の淵に驅るもことわりなり。斯くして來る厭世觀最も世に多し、青春多望の徒が坎坷數奇、失敗に失敗を重ねて遂に現世に絕望し、自家の目的を自ら破却し去るに了るが如きは皆此の部に屬せり。吾人の論ぜんとするは此の種の厭世觀の由來なりとす、之れに凡そ三種あり、(一)人生の目的を平等心差別心兩面の滿足に置けるもの、(二)之れを平等心の滿足に置けるもの、(三)之れを差別心の滿足に置けるものこれなり。人生の目的成就したる結果は必然

(一)平等心差別心兩面の滿足

を來すべしと信じたりしものの、一朝この兩面の到底衝突すべきもの、調和の望なきものなるを見るや悲觀之れより生ず。一時の例を援きて曰はゞ夫の平の重盛が忠孝兩全の途なきに絕望し甘じて死地に就けるが如き是れなり。世或は忠と孝との衝突を目して、直に二種の平等想の衝突せるものとなす、されど此は誤れり。當時法皇と淸盛との不快は、理により是非を匡さば歸着する所あるべし、假に淸盛の暴横を非とし、法皇の之れを惡みたまひしを理なりとせんか、單に平等心の上よりいはゞ重盛たるもの直に馳せて法皇の御味方に參ずべきのみ、何を憚りてか父を顧みんや。此の際重盛が父を見ること路傍の人の如くなるを得ざりしものは必竟親を先にし疎を後にする差別想の無下に蔑視し去るに忍びざるものありたればなり、孝も此の如き意義なりとせば孝は差別心に根ざせるの德といふべし。親を捨つるに忍びざるは差別心の德なり。理に就き君に奉ずるは平等心の德なり、(此等につきては論あるべけれど此には省きつ)、しかも二者共に善なり、軒輊し易からず、此に於てか衝突の已むべからざるものあるなり。此の例を全人生の上に應用するときは、則ち本條の厭世觀となるべし。さればこの種の厭世觀を構成するの要件は次の三條ならん、第一、人間に差別平等の兩面あるの事實を認め、第二、この兩面ともに眞にして輕重の分なきことを信じ、第三、而して兩者の到底調和すべからざるを斷定すること是れなり。兩者の調和するを容すときは樂世主義に入るを得べし。若しくは厭世に陷らざるを得べし。次に人生の目的は

(二)平等心の滿足

に伴ふを以て足れりとするの論者あらんか、人生は冷かなる理性の滿足に終るべし、差別心の欲の如きは初より存在すべからざるものとなるべし。而も實際の人世にありては、差別の欲禁ずるに由なく、精進に精進は重ぬとも、動々もすれば乃ち退轉して煩惱の濁を着す。換言すれば、本來存すべからざる差別心の存せるため、人世は汚濁の淵となり煩惱の宅となる、厭離穢土の念は之れより生ずるなり。ストア學派、Kantian Rijorism は知らずといへども、東洋思想中にはこの類の厭世觀最も多し、之れに要する三件は、第一差別平等の兩面あるの事實を認むること、第二、此のうち平等心を是とし眞とし差別心を拒排すること、第三、しかも差別心の到底現世にては脫離し難きを信ずること是れなり。差別心を拔去すること容易なりとするものは厭世に到らず、一派の小說家等が描く賢人君子は大抵かゝる人物なり。最後に人生の目的

(三)差別心の滿足

を來すにありとし、平等を否定するものあり、

而も尙ほ否定したる平等心の抑へ難きありて、我れをして差別の欲に耽るを得ざらしむと觀ぜんか、此にも厭世觀を生ず。之れに要すべき三件は、第一、差別平等の兩面あるの事實を認むること、第二、差別心を眞實とし平等心を妄とすること、第三、されど尙現世にては平等心の芟除し盡し難きものなるを信ずること是れなり。而して此のたぐひの厭世觀は實際あること稀なり、これ一には人間の本然の到底平等心を無視し得ざるものあると、一には若し之れを無視し得るほどの人ならんには、一時抑壓し去りて差別心の欲に耽ること難からざるとに由るならん、此れらの人はやゝもすれば劣等なる快樂主義に入るなり。

人生の目的を苦とするの厭世觀

前段論ぜし所はすべて先づ人生の目的を立て、而して之れに達し得ざるに及びて之れを破壞し去り、人生を厭ふに終るものなり。或はまた、人生の目的を以て苦の結果を生ずべきもの、卽ち人間の避けんと欲するもの となすの論あり。此はみづから目的を立ててみづから破却するものなり、何となれば、既に目的といふ限は之れを得れば快なるべきに却りて苦なりといふは矛盾なればなり。おもふに此の論は前に擧げたる(二)(三)等の場合の變形せるものにして誤謬を含むの論たり。試に(二)の例に就きて言はんに、論者以爲らく人生の目的は平等心の滿足にあり、されば其の結果の苦なること例へば義のためには愛をも捨てざるべからざるの類也、人間何を苦みてか强ひて斯かる世に生存し、斯かる不快の目的を追ふを要ひん、世にある限は苦しき目的を追求せざるべからず、死してこの苦を解脱するの安に如かざるなりと。吾人は此の說を難ずるに一種の快樂說なりといふを以てせざるべし、快樂と目的との關係は前に論ぜし如くなればなり。此の說の缺點は平等心と差別心とを混淆せるにあり、平等心其の欲する所を成し得たるの結果は、平等心其の物の滿足となるも差別心には苦となること、人事往々にして然り、論者は此の際に誤謬の見を插みて、差別心の苦を平等心の快とを混同したるものといふべし、若し此の如く平等心と差別心と快苦相逆ふを咎めば、飜りて(一)の厭世觀に參すべきなり。夫の仁義は人生の目的なれども之れを成ずるは苦なりといひ、又は肉體の快樂は人生の目的なれども之れに耽るは苦なりといふが如きは、概ね此の謬見的厭世觀にして、其を構成すべき要件は、第一差別平等の兩面の存する事實を知り、第二其の一方を是認し他方を非認し、第三非認したるものの苦を是認したるものの滿足の上に蒙らしめて是認したるもの其の物の滿足は苦の結果を生ずと斷案するにあり。

外に初より人生の目的を否むの論あり、此は人生に目的なしとし、一躍して他界に之れを求むるものなれば、立脚點おのづから以上の論と別なり。

また人生の兩面を認むるに及ばずして厭世觀を構ふるものあり、道理以外、平等以外に人生なしとするもの、及び煩惱心、差別心の欲を追ひて顧みざるもの是れなり。平等の一面に埋頭するものは、萬事この範圍に於て自由に成壞し得べきものと信ずるがゆゑに、反對の原理なる差別の傍より之れを覊絆するを知らず、幾たびか蹶きて遂に吾生の厭ふべきを觀ずるに至る。差別の一面に執するものは乃ち一意煩惱の欲を追ふのみにて、平等の大法の高處より之れを限れるに心つかず、此に於てか歡樂の極めがたく富貴の恃みがたきを觀じて我れと厭世の淵に趨くなり。さはれ此等は畢竟するに前に揭げたる三類の何れかに歸宿すべきもの

にて、此のまゝにては取り出でて論ずるの價値なしとす。

悲劇の種類を論ず

上

悲劇はおよそ三面より論ずるを得べし、第一悲劇の哲理、第二悲劇の美、第三悲劇の結構これなり、而して本論の主とする所は此の第三の問題を研究するにあり。今主題に入るに先だち、第一、第二の兩點に就きて吾人の取る所を一言し置くべし。悲劇の理に關する學說は今日まで多樣ならず。それ差別の調和といふことを萬有存在の一原理とすれば、之れに正反對なる差別界の衝突といふことの、到底存在を害ふものなるは言ふまでもなし。されば人間社會の上に見るも、調和は人生の幸福を意味し光明を意味すれども、衝突は悲慘、暗黑の半面を表す。或は人情の柵にせかれ、或は讒諂邪惡の毒に中り、盲運のため、錯誤のため、つぶさに人生の苦趣を味ふもの、此等すべて人間界の衝突にあらざるはなし。義理人情の柵とは情と理との衝突をいへるなり、讒諂邪惡の毒とは善人と惡人との衝突をいへるなり。しかも人生は終に衝突なくして已むべきものにあらず、社會の進步を助くるに於て衝突はまた人生必須の一原理なり。之れを河水の混々として晝夜を舍てざるに譬ふ、其の溶々は以て人生の順境に比すべく、其の巖に激し隈に蹙まるは以て世路の艱險に比すべし。悲劇は乃ち此の衝突に由りて人生を描寫せんとするもの、猶畫家の險山難水に筆を着けて全幅の景を眞にせんとするが如し。言ひ更ふれば、悲劇は衝突以上の人間を寫せるものなり、但し斯くいへるのみにては盡きず、悲劇とは人生の衝突が其人物の死に迄るまで解け去らざるさまを描けるものなり、主人公の死によりて僅に衝突の此の世より拭ひ去らるゝの謂なり、之れを悲劇的結案といふ。

次に悲劇の美的快感を吾人に與ふるは何故なるか。之れが解釋は古來一ならず、或は之れを藝術の力に出るとし、或は之れを崇高の理に同じとし、或は之れを利己の一念に基かしめんとす。吾人は之れを同情性の滿足に歸せしむべし、即ち悲劇によりて人間美の益々圓に現はるゝと共に、吾人の之れに對する同情ますます切なるを得、この切なる同情其のものはやがて美的快感の根ざす所たり。

下

悲劇の結構とは人物の運命をして悲劇的結案に達せしむるの模樣を謂ふ、之れに相反對せる二系の說あり、一は稍々廣き意にての善惡因果說にして、他は生存即罪惡說なりとす。審に言へば、因果說にありては、悲劇的結案をして必ず其の人物の上に由來せしめ、犯せる罪、性格の缺點、錯誤等の原因ありしがために、悲劇的結果に到達せるものに外ならずとなす。すなはち悲劇によりて現世の無法無秩序のものにあらざること、罪と罰との必然相平均すべきものなることを說明せんとするなり、故にまた此の說は之れを樂世的悲劇論ともいふべし。生存即罪惡說は乃ち始より人生其の物の罪惡なる所以を前定して立論す、以爲へらく、現世は穢土なり、火宅なり、天道必ずしも是ならず、姦邪時を得て忠良却りて窮途に泣くもの、見わたす限り世間は此の如し、人生豈厭ふべからずや。而して最も善くこの理を說明するものは悲劇なり、吾人は悲劇に感興を發して現世に執着するの念を斷つべしと。悲劇的結案の常に其の人物の缺點、罪惡、過誤等より來らずして、却り

て自然の人事上に織り出さるべきを主張するなり。前者に對して此の説を厭世的悲劇論といふべし。

さて上の二説は何れか是にして何れか非なる。思ふに兩者共に或度までは眞にして其の以上は偏せるの論なるべし。之れを個人と社會との上に見よ。或時は個人罪(固より廣義にての罪)ありて自ら亡ぶることあり、此の場合にては善悪應報の分まことに顯著なり。或時はまた、社會(尠くとも當人以外の四圍)に罪ありて而も個人の之れが犠牲となることあり、此の際にては善必ずしも勝者にあらず、悪必ずしも敗者にあらず、强弱の標準別に存するなり。樂世論者は個人に罪あるを知りて社會に罪ある場合を認めず、厭世論者は社會、否人生其のものに罪あるを知りて個人に罪ある場合を等閑に附す、共に長短あるを免れざるなり。

樂世論者難じていはく、社會の罪もと之れあるべし、しかも尙他に個人の上に罪ありてこそ初めて悲劇的結案を生ずるなれ、單に社會の罪といふを以て個人を殺すが如きは、天道の本意にあらず。例へば世を擧げて濁れるの際に獨り皓々の白を以て處るもの、彼れは少くとも和光同塵といへる處世の一原則にたがへる點に於て罪あり、以て甘じて悲劇的結案に服すべきの類也と。吾人はむしろ斯かる論の强辯に近きを信ず、人固より神にあらざる限は、君子も欺くに道を以てするときは欺かるべし、オセロ、デスデモナは言ふに及ばず、コーデリアの清淨純潔を以てするも、此の如く穿鑿し來らば多少の缺點なからんや。之れを極言するときは世の悪人の爲に欺かるゝ者は凡て欺かるゝ點に於て缺點ありといはざるべからず、强ひて斯かる薄弱なる據を索め來りて悲劇の因緣となし、却りて他の重き社會の罪といふが如きものゝ天網に漏るゝ所以を觀過す、至當の論といふべからざるなり。必竟これらの論者は、因果の理を狹く解したるの弊に坐す、彼の勸懲説は見地の最も狹隘なるもの、樂世論はやゝ廣けれども尙五十歩百歩の譏を免れざるものといふべし。勸懲論者は人間の有意的善悪を根柢として因果應報を說き、樂世論者は之れを擴めて性格上の缺點、過失等をも應報の因となす也。されど此の外に更に差別界必至の缺點として、個々人相互の地位、關係より織り成さるべき罪悪の存するを知らざるは二者一なり、約言すれば到底個人の罪のみを認めて社會の罪を認めざる弊あり。或は社會即ち個人の集合にして、社會の罪といふも必竟は個人の罪の相寄れるものに外ならずといふ。何ぞ必ずしも然らんや、松に聲なく風に聲なし、而も松風相ひて籟をなす、社會の事も亦此の如きのみ。且つたとひ個人の罪相集まりて社會の罪を成ぜんとするも、報を受くるもの常に罪を荷へるものにあらざることあるに於てをや。

厭世論者は曰く、個人の罪を認めざるにあらざるも、畢に於て社會人世の罪の居多なるをいかにせん、且つ個人をして罪を犯さしむるが如き不完全の社會は既に罪あるにあらずやと。斯かる厭世觀を根柢より說破するは容易の業にあらず、此には只人間の本然が實際世の進步といふことを豫期し、及び進步の頂點として罪悪跡を絶てる圓滿の社會を想像し得るの一事を以て之れに答へんのみ。人生に悲劇あるは、其の到底罪悪汚濁の淵なるに由るか、はた不完全より完全に向ふの途次、崎嶇坎坷の免れがたきものあるがためか。吾人は後者の意義にて樂世的ならんを欲するものなり、即ち個人に罪ある場合を認むると共に社會に罪ある場合をも認め、而して社會進步のためには個人の遂に之れが犠牲となることあるの理をも信ずるものなり。

以上の所論はむねと人生の上より觀察せるものなれど、更に之れを劇として見るも同樣の結論に到るべし。一切の悲劇の動機を主人公の罪に歸すると、社會の罪をも之れに交へ用ふると、美的快感を買ふに於て差等あり。戀のために死するの『ロメオ、エンド、ジュリエット』は『ハムレット』『キング、リーア』の多趣なるに如かず、はた『博多小女郎浪枕』『戀八卦柱暦』等複雜なる悲劇に至りては、皆多少社會の罪に筆を着けざるなし。個人の罪を主とするの悲劇にありては、假令主人公に同感するの度は深切なることあらんも、之れにより全人間に同感すること難し、此をもてこの種の悲劇は悲哀なるを得るも高大の致なく、眞に悲壯の境に達すること尠し。之れに反して全人間、全社會の罪によりて悲劇的結案を結構するときは、個人たる主人公に同感すると共に、之れに對する人間の全運命といふことにも同感すること容易に、何人も高大悲壯の妙味を解し得べし。我が心中悲劇の悲壯といはるべきものに乏しきは、職として此の理に由るか。

個人の罪によりて悲劇を成すにも、或は差別の欲に走りて平等を忘れたるもの、或は平等の一面に偏りて差別を疎にせるもの、固より種々なるべし。社會の罪といふにも品あり、二三の惡人が人情の弱處につけ入りて罪なき人を陷るゝが如き、又は盲運に役せられて悲慘の境に沈淪するが如き、此れらは其の最下層なり。雜多の性格の相寄れるため、何れ罪を犯せりともなく、錯綜糾紛して悲劇をなすの類は其の中層なり。己れの把持する主義、道德と當社會の主義、道德と衝突して悲劇的結案に到達するもの、例へば之れを小にしては革命時代の偉人が往々にして陷る悲壯の末路、之れを大にしては全人間の惡と鬪はんとせる釋迦、基督の徒の如きは其の最上層なり。而して若し之れらの種々を交錯せしめたるものあらば、其を以て悲劇の最も妙なるものとすべし。

終りに、樂世的悲劇論者は、當然の結果として、悲劇の快感を道德の圓成せらるゝに基かしめ、厭世的悲劇論者は、之れを現世の穢土たるを示すに由るとなす。すなはち一は人間の道德心の滿足を主とし、他は人間の厭欣心の滿足を主とするなり。此に於てか前者は漸く美感と實感との區別を沒せんとし、後者は悲劇と喜劇と觀美の方法を二途ならしめんとするの傾あり。此は他日題を改めて論ずべければ今は言はず。

劇詩人と人生觀

造化意ありて天地を造れるか知るべからず、忖度するものは我れの心なり。精舍の鐘の音に諸行無常を感じ飛花落葉に盛衰のことわりを悟るもの、彼れの現世厭ふべしと念ずるは猶井して飲み畊して衣る無懷氏の民の知足淨土の樂趣に飽くが如きのみ。厭ふべきが如く樂むべきが如く渾圓として端なきものはそれ天地の實相か、厭樂の目は畢竟觀るものの心にあり。

詩人は第二の造化なりといふ、劇詩人に於て最も然り。手に眞宰の樞機を把りて、生殺與奪心のまゝ機微の運命を描く、この剎那、詩人の懷臆は江漢の廣きよりも廣く霽月の淸きよりも淸かるべし。偏執の見を將りて强ひて自家の人間を染め出さんとするが如きは固より客觀詩人の事にあらず、造化の心なきが如く劇詩人はた此の意に於て無心なるべきなり。さはれ詩人もまた人なり、日常差別の世に處して、朝三暮四、喜悲の其の身に蝟り來るに逢ひては、誰れか厭樂の間に出入することなしといはんや。一面に平等無私の詩人、むしろ第二の造化翁と

して花にも同情の涙を濺ぐの彼れは、他面に社會の一分子として或は生をはかなみ世を憤ることもあるべし、しかも其の社會に處するの心は以て詩人の心と混ずべからず。此に於てか劇詩と劇詩人の人生に對する觀念とは如何なる關係あるかの問題出づ。就中悲劇と其が作者の厭世觀との關係如何。

人間の全相を寫さんとするものの、ことさらに我見を其の間に插むべからざるは既にいへるが如し。即ち劇の極致をいへば、其の描ける所は直に無端無方の天地と相通じ、心ありて作爲せる我れの小天地觀とは相關せざるを本意とす。否天地觀ある必ずしも咎むべきにあらず、思量以外直に造化の大天地觀と冥應する底のものならんには、小天地觀といふとも誰れかは咎めん。要するに劇詩は作家より出でて而も作家の見地を離れ、獨立自主の姿をなさざるべからざるなり。されど此は之れ極致につきていへるのみ、シェークスピヤの作或は之れに近かるべく、近松の作また或は之れに近かるべし、而も事實果して然りや否やは本論の問ふ所にあらず。バイロンが世を憎むの念、衷に盛に情を抒するの『チャイルド、ハロルド』に成功して、人間を描くの『マンフレッド』『ケイン』等に失敗せる、縱令失敗は之れありきといへども、劇詩の必ずしも作家の影を宿せるものなきにあらざるを見るに足らん。しからば即ち劇詩の上につきて作家の觀念を窮めんとする、如何せば可ならんか、劇詩人が抱持する厭世觀の其の作る所の悲劇に見はるゝの模樣如何。

此の問題に答へんとせば、先づ之れを作劇の趣意に求めざるべからず、作家が悲劇に筆を着くるに至れるは何故なるか。時としては單に功を收め易きのゆゑを以て悲劇を擇ぶ、猶畫家が春水の畫き難きを避けて、秋渚蘆荻の畫き易きに就くの類なり。又は當代社會の嗜好に剌せられ、其の以外に一歩を轉ずるの餘地なかりしため、可惜手腕を悲劇の一面にのみ揮ふものあり。これらはすべて全く自由なる詩人の境にあらず、斯くして出で來るの詩篇は、設令幾百部に及びて而も悉く一樣の悲劇なりきとするも、此の故を以て作家は人世を一大悲劇と觀ぜりとはいふべからず。之れに反して作家眞に天地を涙の谷と觀じ、此に感發して悲劇を成せりとせんか、此の事實をだに定かならしむるを得ば、作は僅に一篇にとゞまらんも、以て優に作家の厭世思想を窺知するに足るべし。所詮本論の要は第二の造化が其の作に先だちて懷抱する本意の何邊にありしかを研究するにあり。吾人は之れを四點に分ちて下に論述すべし。

第一、作家みづから權に作中の或人物に化し其の言動によりて自家の本意を表白することあり、第二、其の主人公はやがて作家自身にして、隨うて全曲に通徹せる悲慘の聲は作家の感慨に外ならざることあり。されど上の二者は凡て未だ純粹なる客觀詩とはいひがたし、蓋し斯く明に主人公若しくは其の他の人の言動に作家の影の憑れることを知り得るに於ては、其の詩は到底作家一人の外に眞の人間を寫すこと能はざるべければなり。第三、主人公と、作家と直接に合體せりといふにあらざるも、描く所の人間すべて作家の實相と觀ぜる性格を具し、而して其の性格は一途悲劇的なることあり。第四、個人の性格上には別に作家の厭世的所見存せざるも、千差萬別の人間の錯綜せる際に、必然悲劇的結構の生ずる所、作家の意見を寓せるものなることあり。而して第三、第四は共に眞の純客觀詩につきての論なりとす。

此に悲劇ありとせよ、而して作家の厭世觀此のうちに見れたりとせよ、吾人は此の上につきて、更にこまかに前段の四點を論究すべきなり。或者はいはく、曲中の某の人物が云々の言動を

なせし所、明に作者の厭世思想を表示せるものなりと、例へば『ハムレット』の曲中にて公子ハムレットが芝居道の講釋をなすあたりを、直に作者シェークスピヤの意見と見なすたぐひをいふ。此は前段第一の場合なり。論者若し此の如く結論し來らんとせば、此の際に要すべき立證と判斷とは、其の曲中の人物の片言隻句、果して作家自身の意見なりや否やを明にするにあり。

或者はさらにおもへらく、曲中の主人公は其のまゝ作家の面影にして、主人公の世を惡み天を恨む悲慘の光景は、やがて作家が現世を厭ふの念を直現せるものに外ならずと、例へばハムレットを直にシェークスピヤの寫眞と見做し、シェークスピヤは實に生死迷途の境に彷徨せるものなりといはんが如し、此は前段第二の場合なり。かくの如く論斷し來るに際して要すべき立證と判斷とは言ふまでもなく主人公の果して作家自身なりや否やを明にするにあり。

或者はまたおもへらく、曲中の重なる人間即ち主人公の性格既に悲劇的結案に到るの外なき缺點を有すとせば、之れ明に作家が人生を悲劇の舞臺と觀ぜし者に非ずやと、例へば心中悲劇の主人公がすべて戀愛の一偏に走らんとするの傾あるを見て、心中悲劇の作者は此の間に自家の厭世思想を寄せたりといふの類なり。此は前段第三の場合に相當す。此の如く論下せんとする際に要すべき立證と判斷とは、要するに作家が性格上の件の缺點を全人間の漏れがたき眞相と認識せりや否やを明むるにあり。而して此の斷證を誤らしむべき事情は種々ある中に、(一)他の事情によりて悲劇の大體の種類、結案等まづ定まり、而してのち之れに恰合すべき性格を擇べるものなるを、順次に轉倒して、作家が好みて性格を擇べるに基くが如く思惟する事。(二)本誌(早稻田文學)前號の悲劇論(前章)にて一言せる如く、作人の罪に因りて悲劇を描くにも、觀やうによりて厭世的と樂世的との二面あり、さるを其の樂世的の方すなはち罪あるものの罰を得て亡ぶの趣を寫せる方の本意を忘れ、一途に厭世の意に基けるものと思ひ僻む事等其の主なるものなるべし。

最後に、或者はまた、曲中の主人公乃至其の他の人物の、罪なくして不幸に陷るを見て、作家が人生を苦趣、罪業の宅と見なせる厭世思想の現じたるものに外ならずといふ、例へばショオペンハウエルの眼に映ぜし『ハムレット』の如き、若し果して社會の罪を描くを以て本意とせるものならんには、之れに由りてシェークスピヤの厭世觀を證せんとするの類なり、此は前段第四の場合に當れり。此の結論に要すべき立證と判斷とは、要するに作家果して斯かる罪ある社會を、人間の全眞相と認識せりや否やを明むるにあり、若し單に之れを人間の半面として描けるものなるが如きことあらば、以て作家の人間觀を表するに足らざること論勿しとす。

夫れ劇に悲劇あり喜劇あり、人生また廬山の面目に似て、右よりすれば嶺となり、左よりすれば峯となり、厭ふべきが如く厭ふべからざるが如し。厭世詩人の作る所必ずしも悲劇のみならねば、樂世詩人の作る所また時に悲涼の調なきにあらず、而して吾人の特に悲劇と厭世詩人との上に就きて論ずる所以のものは、世間往々にして悲劇詩人なるが故に厭世詩人なりといふが如き誤謬の結論に近かんとするものあればなり。且つ吾人は前來號を重ねて、厭世觀を論じ、悲劇を論じ、及び二者の關係する所以を論じ了りたれば、稿を更へて我が國唯一の劇詩人近松が諸作に就きて論究する所あらんとす。

(明治二十八年四月、五月)